

わたしの自己点検

及川 馥

記要の論文を準備しながらこう考えた。大学に奉職して三十数年、来年は停年を迎える。これまでのわたしの乏しい研究生生活を回顧しはじめをつけておくべきではないか。もちろんフランス文学についての論文の他に、わたしの研究時間を大いに侵食した翻訳も加えねばならない。大学の制度も変わったことだし、新制大学の中で育ち、新制大学の教師としてどのように仕事をしてきたのか、振り返ってみることは、わたしにとってはもちろんのことだが、学生諸君にも他山の石として興味のないことでもあるまい。自己宣伝と見る向きもあろうが、その非難は甘受するしかない。しかし最近は大学案内、学部紹介、シラバスと、大学は宣伝の時代にあるではないか。いずれにせよわたしの試みは自己点検であり、本人にとって宣伝より冷や汗の多いことが多いのではあるまいか。またお世話になった紀要の貴重な紙面を汚すようでは申し訳無い気もするが、思い切って書くことにした。

一・準備期間

わたしの文学研究のスタート地点は東北大学文学部フランス文

学研究室である。学部大学院七年、助手一年（一九五三〜一九六〇年）。学部では有永弘人教授のフランス文学史講義（一七世紀古典主義）、古典講読（ボワロウ『詩法』、モリエール『タルチュッフ』）、現代文学演習（サルトル『文学とはなにか』など）、語学講義（ブリュノ・プリュノ『フランス語学史概要』など）。竹村猛講師の特殊講義はつねにバウルザック。ルネ・ピッツェ神父のフランス語会話。集中講義は大学院まで、小場瀬卓三講師（都立大）のモリエール、ディドロ、ボーマルシェ、市原豊大講師（東大）のプーレスト、クローデル、小林正講師（東大）の比較文学など、（一年に一人）があった。

卒業論文はフランス語で書くことになっており、当時の雰囲気は教養部二年で旧制高等学校のレヴェルまで鍛え、なんとか旧制度の学部のレヴェルを維持しようというつもりではなかったろうか。いまにして思えばかなり無理な注文だった。卒論は中間にフランス語のレポートを提出し、有永先生が丹念に朱を加えて下さった。教える側でも相当の負担を強いられていたのである。わたしのテーマはマラルメであり、初期詩篇におよぼしたボードレー『悪の花』の影響を調べた。難解なマラルメも若い修業時代は先輩たちの詩句に触発されて詩を書いていた。モンドールの伝記をたよりにそんなことを考えたが、両詩集の用語索引などまだ出

版されていないころなので『悪の華』を繰り返し読み、用語やイマージュの具体例を漁りながら、若いマラルメの詩作のプロセスを想像した。もちろんそのあと他の先行詩人たちの影響も調べて重ね合わせなければならないが、影響だけを追うと、肝心の本人の意図や、詩情の影が薄くなってしまふ。先行詩集のモザイクを作れば影響問題は解決するだろうが、インスピレーションのことはどうなるのか、詩を作るといふことはパズルではない。卒業論文の口頭試問では、そういうことはあまり問題にされなかった(教室)

でおこなわれた有永先生の学会研究発表の概評などからそう考えたのだが、竹村先生はそういうまだるっこい手法は天にハシゴをかけるようなものとはっきり裁断された)、文学史からの問題と、マラルメの詩の暗誦を命じられ(これは先輩からの示唆があった)、「海の微風」を覚えていったので辛うじてパスできた。この口頭試問ではフランス語のアルファベをいわされHをエッチと言って留年という猛者もいた。あまりのことに空いた口がふさがらないと思ふかもしれないが、むしろ何とかして卒業免状を与えたいという先生方の親心が感じられる。

大学院で有永先生は初めて専門の中世文学を講じられ、中世語の文法からやがて『ローランの歌』の講読に入った。種々のマニユスクリの照合を写真版などでなさりながら、文献学の厳密さを手ほどきして下さった。現代文学演習は院生各自が選んだフランスの研究論文を紹介するという形で進められ、先生は院生のお話をフランス語の原文に目を通しながら聞き、院生の理解の不十分な点を直し、そのあと皆で内容について討論するという形式であっ

た。要領よくまとめることはなかなか難しく、こうしたゼミでは文芸雑誌の評論よりは、学術的な *RIEF* などの論文の方が読みにくくても発表がやりやすいというようなことも分かってきた。この頃のわたしは文学青年だったので文芸評論はなにかと読んでいたのだが、文学研究と評価の違いも分かり、自分の論文を書くための参考にもなった。

A1 修士論文 *Le symbolisme dans les premiers recueils de Paul Verlaine*

(一九五七年)

マラルメではまとまらず、ヴェルレーヌが象徴的な詩を書くにあたってランボーから受けた影響をテーマにした。時間が足らず中途半端なものになってしまった。しかし翌年その一部をもとに「ヴェルレーヌの愛のイマージュ」と題して学会発表したのだからかなり盲蛇だったことは間違いない。なお以下論文に番号をつけ、A1、A2、A3とするが、発表順を示す。翻訳はBとする。

フランス文学について有永先生にぎゅうぎゅう絞られていたにもかかわらず、あるいはそのせいも、息抜きといつては怒られるかもしれないが、英文学の村岡勇先生の大学院の『アンダースタンディング・ポエトリ』の演習にオブザーバーとして加えていただき、ニュー・クリティシズムの片鱗にふれることができた。もちろん英文の友人たちは大分四苦八苦ししていたのだが、こちらは美味しいところだけを頂戴したのである。そのほか英文の友人二人と言語学の長谷川松治先生(『菊と刀』やトインビー『歴史の研究』の訳者でもある)に詳しくバイイ『一般言語学とフランス言語学』を読んでいただいた。のちに構造言語学がもてはやされ、おやおや

と思ったのである。そのほか哲学の松本彦良先生の現象学の講義、あのチョーク箱を対象にした現象学的還元が印象的である。岡崎義恵先生の文芸学は学部るとき最後の講義に出席した。美学を基に文芸を研究するという説はもつともだとしても、肝心の美学は阿部次郎の美学などを読んでもどうして文学研究に役立てるのか皆目分からなかったし、土井光知『文学序説』も感銘を受けたが自分の目前の課題の解決には程遠い高いレベルのものであった。しかしウォレック・ウォレン『文学の理論』が文学研究のすべての分野について新鮮で明快な見取り図を示してくれた。村岡先生のアメリカの新批評の理論や、その背景にあるカッシーラの哲学などの存在を知ったのも大収穫であった。

大学院博士課程では特選題目研究というレポートを出したが、マラルメの散文のシンタクスについての一編の他に、バシユラーの『科学的精神の形成』のアナリイズをおこない、新しい文学研究への糸口を探ったが、アナリイズはともかくできたものの、物質的想像力との関係づけがなかなかうまくいかなかったので、有永先生から意図は理解していただいたが、結果は酷評されてしまった。

院生時代はフランスのヌーヴォーロマンの盛んになり始めたころであり、新しい批評もNRF誌を賑わしていた。院生たちの間から雑誌創刊の話がちあがり *Regards* 誌が誕生した。有永先生の命名である。この小さな雑誌の創刊号に次の小論を掲載した。

A2 「*Ariettes oubliées, I (Romances sans paroles)* の成立」(一九五七年)。

ヴェルレーヌの第四詩集『言葉なき恋い唄』の小品「忘れられたアリエット」が妻と友人ランボーという二つの焦点をもち、意識的にランボーのいう「感覚の錯乱」をもちいて書かれた象徴詩であるという結論はやや強引だったかもしれない。村岡先生には面白かったといわれたので、とてもうれしかったことを思い出す。ともかくこの頃から新しい批評、あるいは文学研究の新しい方法がヌーヴェル・クリティックとしてはっきりと意識されるようになり、文献学でも歴史研究でもない、テクストを対象にした分野がやっと見えてきたのである。

大学院も終わり頃には就職のことがちらついてきたが、だれも決まらない。たまりかねた先輩が発議し何とか有永先生に積極的に職場の開拓をお願いしようと、ある席を設定したのだが、結局だれも言い出しかねて有耶無耶に終わってしまったことなども、なんとなく微笑ましい情景として思い出される。

二. 仙台での私立大学講師

最初の就職先は仙台市にある三島学園女子大学。専任講師として四年制大学と短大夜間部の教養フランス語を教えるだけではなく、中学、高校で英語を教え、中学生のクラス担任までやることになった。しかし東北大学と山形大学で非常勤講師としてフランス語を教えることは学長から許可してもらった。その間『悪の花』(しばらくは華の代わりに花という字を用いた)のイマージュの研究をすすめることができた。

A3 『悪の花』における太陽（一九六二年、『三島学園女子大学研究報告』第五巻）

ボードレールの詩的宇宙の中心に存在する太陽のイマジージュが複合的な意味を持たされ、希望、理想、芸術の象徴であるばかりでなく、官能や愛という生命の象徴として、さらにはその対極の死やスプリーンの象徴として用いられていることを分析した。

その他、『ルガル』誌第七号には、

A4 『悪の花』における目（一九六五年）

詩人をめぐる二人の女性の目のイマジージュを比較し、それぞれが性格の特色を表すだけでなく、詩人との関係までも包みこんでいることを明らかにした。サルトルの『存在と無』に詳述されたまなざしの問題にまで発展させる可能性があったのだが、そのままになっている。

三、弘前大学時代

二年後に、弘前大学文理学部講師（二年後の一九六五年教養部に改組したとき助教授に昇任した）に採用され、ドイツ文学教室に所属した。

フランス語の教員は一名しかいなかったものでドイツに捕虜？になつたように小さくなつていたが、小島尚先生を中心とした暖かい雰囲気の中でいろいろとわがままもいうようになった。四年間居心地は悪くなかったので弘前は第二の故郷となった。その間、フランス政府と日本文部省共催のフランス語教員のスタージュに参加した。プレスタージュは箱根の文部省共済会館に泊まり、講義

はホテルという差別もあまり気にしなかった。本番は南フランスのポーであった。ゴデ教師の発音の特訓はラボをフルに使い、アシスタントまでいたので居眠りもできず、発音矯正にあげくれた感じである。週末の遠足でロンスヴォーの谷を通り、『ローランの歌』を思い出した。またパリに戻ってからもバス旅行があり、フオンテーヌブローを流れるセーヌ川のほとりヴァルヴァンにあるささやかなマラルメの別荘も見た。ゆるやかな流れに浮かぶヨットは優雅な遊びに思われたが、今のマラルメヤンはどう思うだろう。

『悪の花』における時間と空間について論文を書いた。ジョルジュ・プウレの『人間の時間の研究』の影響が著しい。

A5 『悪の花』における時間、その1、過去（一九六五年、弘前大学『文経論叢』第一号）

過去時間についてのボードレールの意識は、現在時との関係で積極的な、明るいものにもなるが、大抵悔恨にむしばまれ中間的な灰色である。

A7 『悪の花』における時間、そのII、未来と現在（一九六六年、弘前大学教養部『文化紀要』第一号）

未来と現在の意識を、詩人の実存意識である苦悩と死を媒介として分析してみると、現在の意識は流失と停滞の二極構造をもち、さらに苦悩を方法的に芸術化することによって、人工的な明るい未来が期待しうるという構造になっていることを明らかにした。もちろんアンニュイという時間の流れの停滞の意識、あるいはむしろ洪滞の諦めた状態が基調である。なお洪滞と正反対の時間流

出の顕著な意識も見られる。実際の人生において満足させるべき理想をもつことが禁じられ、死ぬことだけが唯一の希望という倒錯した生活環境があり、芸術創作という仮構の世界にすべてを託す仕組みが析出された。

A6 『悪の花』における内的空間（一九六六年、東北大学文学会『文化』

三〇巻三号）

これは詩的世界の空間意識を、深淵、亀裂、閉鎖と収縮、人工の空間、虚無という面から考察し、ボードレールのといわれる独自の展開をなしていることを探った。当時のヌーヴェル・クリティックの研究に対し伝統派からの批判が出され、それに対する反批判が書かれるという時代に、新批評派に駆け参じるつもりであったのだが、深淵については、ヤスベルス、ミンコフスキー、ビンズワガーなどの精神分裂病の症例にもあたり、精神分析のフロイド、ユングなども読んだが、まだまだラカンなどは名前も知らなかった。なんとか特色を出そうと試みている点に勉強の跡がうかがわれると思う。官舎が隣ということもあって哲学の亀尾利夫先生に教わることが多かった。一方、買いこむ本が、日本美術全集となったとき、ある種の空恐ろしさを感じた。これでいいのかと思ったのである。

四、茨城大学時代、フランス留学

茨城大学文理学部助教授として赴任したのは一九六七年五月であるが、六月人文学部と改組され、フランス語フランス文学講座

に配置換えとなった。講座創設者は佐藤昭夫氏と中島昭和氏である。中島氏が中央大学に移られ、わたしはその後任であった。その後、外国人教師のポストを作り出し、文学科から人文学科への改組では、フランス事情というポストをつくることになる。そして九六年の改組では欧米文化論講座所属（フランス文学）となった。さて赴任した翌年一〇月からフランスに一年間在外研究員として出張となって、三五才の年をフランスで過ごすことになった。専門の学生を教えるのだから文部省へ大学当局が交渉してくれたという粹なはずはからいではなく、一年前から次大への割り当ての枠が増えたのだと思われる。以前からいたひととはだれも希望を出しておらず、事情を知らないで応募した新入りに白羽の矢が立ったということらしい。翌年から応募者が殺到した。

一九六八年は五月革命の年であり、一〇月末になってもソルボンは再開せず、あてにしていたフランス近代文学担当で旧知のデュリー教授は、やっと再開した講義を学生に少し野次られるとさっさとラジオ・ソルボンヌに切り替えてしまった。しかしデュリー教授は若手のボードレール研究者を紹介してほしいというわたしの願いをかなえ、当時パリにおられた阿部良雄氏を推薦して下さった。高等師範学校出身の阿部さんはそのころ顎髭をのばし、大学改革にも積極的な意見をもっておられたが、現在は日本フランス文学会の会長の要職にあられる。それはともかく阿部さんはさっそくコレージュ・ド・フランスのジョルジュ・ブラン教授の講義を聞くことを薦めて下さった。ソルボンヌと道路一本隔てただけのコレージュでは、紛争などどこ吹く風と、平静に高度な講

義がおこなわれていたのである。

ブラン教授はスタンダードル研究で博士号をとられたが、若くしてボードレール論を出し、クレペと共著の『悪の華』批判校訂版はボードレール研究者の不可欠の基本文献である。フランスの学者ピラミッドの最高に位置するパリ大学から、さらに上にランクされるコレージュ・ド・フランスでのブランの講義は、三年聞いて初めて分かるという伝説もあるほど難解なものであった。わたしの翻訳のあとがきから引用すると「たった一年しか通わないので、とうてい口はばつたいことはいえないが、(事実フランスの大学生とおぼしき聴講者たちも二週目、三週目とだんだん姿を消していった)その年度のテーマ、ボードレールの現代性が、(コンスタンタン・ギース論を中心にとり上げられ、当時のヨーロッパを支配していた美意識とどのように対立し、またその特異性のよってきたる源流をたどって、一八世紀におもむき、庭園趣味の変遷を論じ、さらには英国の(画家)ホガース(の著作)『美の分析』を発掘し、ボードレールの美意識との関連を追求する、というようなスケールの大きなものであり、しかも精緻な実証と鋭敏な感覚に支えられた柔軟犀利な知性の運動は、まさしく聴衆に目くらめく思いをさせるものであった。」

講義には耳なれない単純過去などがどんどんでくるのはともかく、すべてを厳密に精密に規定し、必要なことは細部にいたるまで盛り込まずにはいない入り組んだ文体は、わたしの耳に途方もない緊張と努力を要求した。慣れるまでは本当に疲れてしまい、二時間の講義の後半は先生の低い声がわたしの耳を素通りしてし

まうのだった。

阿部さんからはまたソルボンヌ付属の外国におけるフランス語教師養成所のことを教えてもらい、試験を受けて入学し、夜はそこに通うことにした。リセの教員の若いアグレジェたちが、教育を分担し、簡単な講義の他に、エクスプリカシオン・ド・テクストが実習として課された。

わたしのパリの宿は、前年度在外研究員の小林三衛氏のおられた所である。小林さんに手紙を出しても旅行中だったとかでなかなか返事がもらえず、直接家主に手紙をかき、小林さんの後に入ってもらったのである。ソルボンヌが開講しないのでいらしているわたしを見かねて、家主のオチャコフスキー夫人はふたりのヴォランティアアの相談相手を見つけてくれた。ひとりにはアグレジェのT嬢、もう一人はメトリーズのD嬢いずれも一六区住まい。リセの教師T嬢からは『悪の花』のエクスプリカシオンを、D嬢からは韻文の朗読法を三カ月ほど習った。無音のeの微妙な息使いはなかなか耳で捕らえがたいので苦労した。T嬢の説明は堂に入ったもので立て板に水のように超スピードでおこなわれ、アグレジェの力量に舌を巻くだけであった。そこで録音させてもらいあとから聞き直し、次回に質問することにした。T嬢はまもなく結婚されたが教会での式の案内状にT伯爵令嬢とB男爵令息とあるのにびっくり仰天した。うっかり上流階級の中に足を踏み入っていたのである。

再開したソルボンヌではカステックス教授の講義に出席した。アグレジェの試験準備用の講義だったらしく、学生が大勢いたわ

りには、通り一遍の、ほとんど素人向けの概説で、ブラン先生の
玄人向け講義とは大違い。しかし目的が違うのだから止むをえな
いのであろう。したがって、あまり熱心には通わなかった。

そんなわけで日中は時間があつたので、ルーヴル美術館、印象派
美術館などにフリーパスの券をもらって通い（ボードレールは美術批
評家でもあつたから彼の研究者だというと簡単にもらえた）、そのほかパ
リ市立美術館とかギュスタヴ・モロー美術館などにも足を運んだ。な
んといつても最大の行事は六八年から六九年にかけて、一年遅れ
の死後百年ボードレール展がプチパレで開催されたことである。

その目玉は美術批評家としてのボードレールの批評の対象とした
当時の「サロン官展」出品作品であり、フランスはおろか世界中
から集められて展示されたのである。それはやはり文化的な大事
業だった。ボードレールから激賞されたがその後ひとの目にふれ
ることのなかったウイリアム・オースリエ『回春の泉』はロンド
ンから、注目すべき作品といわれたカトランのアメリカインディ
アンを描いた絵はワシントンから、ウジェーヌ・ドカンの二枚が
アムステルダムからというように一堂に集められたのである。も
ちろんルーヴルからもドラクロワやクールベなど見覚えのあるも
のが何枚も出品されていた。

また六八年はパリの演劇活動が一段と活発になった年でもある。
パリでは伝統への挑戦は日常茶飯事であるが、伝統を徹底して破
壊し、新しい美を作り上げようという熱気がむんむんしていたの
である。それが空回りして独りよがりの作品も多かった。ともあ
れ演劇は五月革命の解放した情熱の大きな受け皿であつたことは

間違いない事実である。ジャン・ルイ・バローの下で勉強して
いた仏文科の旧友とサンミッシェルの本屋で十年ぶりに再会した
こともあって、時間の許す限り大小様々の芝居小屋に通うことにな
つた。国際演劇祭まであつて日本からきた狂言をB嬢に見せる
ことができた。

六八年の冬、川端康成のノーベル文学賞受賞のニュースを聞き
て、早速『雪国』の仏訳を読んだことも懐かしい思い出である。宿
のマダムやB嬢は川端の小説に美しい叙情性は感じたようだが、
主人公の正体がかめず、いろいろと聞かれるはめになって、日
本の男性のモラルまで疑われる始末。今考えても主人公は男性と
しては人騒がせな存在のように思われる。しかし川端は『伊豆の
踊り子』、『山の音』、『千羽鶴』とフランス語に訳され、現在では
ペーパーバックで読めるし、最近、長編と中編を収めた「ポショ
テック」の一巻本が出たくらいだから、この三〇年の間にカワバ
タはフランス人にとって身近な作家になっていることは間違いな
い。その他、井上靖、遠藤周作、安倍公房などが文庫本で気軽に
フランス人に読まれている。日本での、フランス現代作家の翻訳
が大衆化とは程遠いのはなぜだろう。学生の文学離れという前に、
文庫化や流通の問題を論じるべきかもしれない。一方、かつて文
庫本で手軽に読めたモリエール、ラシーヌはおろかモーパッサン
ですら見当たらなくなつた。ひとつつ思い当たることは、学生の漢
字の知識の乏しさである。文庫本の旧訳を敬遠することになり、
ついには本屋の棚から姿を消すことに拍車をかけたのであろうか。
そうだとすれば新訳かあるいは漢字のルビ復活しか対抗策はない

のかもしれない。

その後一九七八年に短期在研でフランスに行き、また私費で二度パリにわたり、国立図書館にかよい、美術館めぐりや、観劇の機会をもったが、せめて五年に一度ぐらゐは行かせてもらいたいものである。多くの私立大学ですでに実現している七年に一度の研究のための休暇制度は国立大学でも必要であろう。また、昨年度つまり一九九六年四月から文部省からの予算において思想や歴史関係が実験扱いとなったのに、文学関係は例年通り非実験なのは腑に落ちない、ということをごここに記しておこう。

五、ボードレール論と翻訳

帰国してから取り掛かった研究は、ヌーヴェル・クリティックのボードレール研究であるが、まずブランの本から説明しておきたい。

B11 『ボードレール』(一九七七年、牧神社、のち沖積社)

これは阿部良雄氏との共訳である。そもそもテキストがなかなか見つからないので、当時在外研究でブザンソンにおられた弘前大学一之瀬正興氏(現成城大学)をわずらせてコピーを入手した。また共訳者の阿部さんがフランスに何度目かの滞在中ということがあった、わたしの訳稿を前半部分は渡仏する方に持参を依頼し、後半を航空便で送ったのだが、原稿は手紙扱いということを目玉の飛び出るような料金を請求されたことを覚えていいる。しかもできあがった訳文はまったく阿部さんの文章になっていたので感嘆

した。阿部さんはブランの口調をできるだけ尊重し、訳文にも巧みにそれをとどめたのである。内容は「感応する恐怖」、「人々神」、「有限の中の無限」と三部に別れているが、かなりメタフィジックな議論が展開され、よくいわれるスエーデンボルグとかメーヌトルの他バランシュ、ブリエール・ド・ボワモン、ラベ・コンスタン、サン＝マルタンなどの神秘思想家なども読み込み、弱冠二二歳の著者の鋭い筆の運びは、詩人ボードレールを立派な思想家に仕立てたのである。ブラン自身によって立つ基盤は当時精神の哲学を唱えていたルイ・ラヴェルによってブランが構築したのである。「一九三〇、四〇年代フランスにおける哲学的文学批評の傑作」といわれながら永らくまぼろしの名著といわれた原書を日本語にすることにいささかでも協力できたことは訳者としても感慨一しおである。

B5 『ボードレールのサディズム』(一九七三年、牧神社、のち沖積社)

「ジョルジュ・ブラン・ありうべき批評家」という阿部良雄氏の序文つき。ブラン自身の『ボードレール』を前提にしたあるいはそれを補足する論文集である。「ボードレールのサディズム」、「ボードレールと魔法」、「ボードレールとサルトル」、「散文詩について」、「三つの焦点」を収める。

ブランの主張は「煎じ詰めるとボードレールのサディズムは、感情の深い根から多彩きわまりないその放射物まで、倫理的、宗教的次元に移行しうる」偏執的自己懲罰者のものであり、だれか他人を苦しめたとしても「同意をえず、罪を贖う手段」でしかないというものである。第二論文の魔法は、隠秘学、妖術について

のボードレールの関心のよってきたる事情を探り、最後は思考の錬金術によってことばの暗示的魔術の創始にいたる。第三論文はサルトルの実存主義的な精神分析による『ボードレール』論批判である。サルトルの論をきめ細かく追いながら、性急な断定を反証をあげて覆し、異端糾問官、検察官サルトルがボードレールの内面に入って行かず、「ボードレールは苦悩を装っていた」ということは、とりわけ不当なことだと反論する。ひとりの人間にたいし、そのひとが悩むことがなかったと決めつけることになり、まさにサルトルのいう人間の尊厳を侵害することになるからである。サルトルが「自己欺瞞」だといって詩人に投げつけた非難のことばが、いかに的外れであるかを、ブランは諄々と説いている。

「散文詩について」はフランス文学史における散文詩の歴史をたどり、韻文と散文の特質をポエジーの本質との関係から考察し、『小説散文詩』が詩人の望んだような理念を実現しているかを、子細に分析してみせる。定型詩の作詩法を放棄した自由な散文が、「単純な散文の骨をけずる、散文がもはやその意味をもたなくなるまで前進させる。そしてそのなかで使われた語群のなかに浮遊している要素が、不思議なしかも爽やかな邂逅をおこなうことによって、はじめてなにかがおこなわれる」という。この見本は「外国語で書かれた定型詩の逐語訳」である。散文詩はユイスマンズの耽美的小説『さかしま』の主人公デ・ゼサントがいうように文学の最高峰となる可能性をもつゆえんが明らかにされる。

かつてブランはコレージュ・ド・フランスの開講の辞で、かれの占める現代文学の席は、もともと詩人ポール・ヴァレリーが講義

し、ついで文学史研究の大御所ジャン・ポミエが襲った席であることを回顧し、歴史的なことはすべて空想的だと歴史の虚構性を徹底的についたヴァレリーの考えと、文学作品の形成過程の歴史的研究にも内観（アントロスペクション）が必要だと説くポミエの態度とは、より高い点で合致すると述べている。おそらくそれがブランの文学研究の理想なのであろう。

六. ヌーヴェル・クリティックをめぐる

A10 「ボードレールとヌーヴェル・クリティック」(一九八三年、『ユリイカ』ボードレール特集号、のち『ボードレールの世界』)

これは「テーマ批評を中心として」という副題をつけてあるが、バシユラルル、ジョルジュ・プーレ、ジャン・ピエール・リシャール、シャルル・モーロン、ジャン・ポール・ヴェベールという五人の批評家、研究者がボードレールをどのように取り上げ、どのように分析し、どのように説明したかを簡潔に紹介した。

その前にヌーヴェル・クリティックの二人の批評家(クリティック)について茨城大学文学部紀要(以下『文学科論集』と略)に書いている。

A8 「ジャン・ポール・ヴェベールの批評的立場」(一九七一年、『文学科論集』第五号)

A9 「ボードレールとプシコクリティック」(一九七三年、『文学科論集』第六号)

後者は精神分析的な立場からの文学研究を進めてきたシャルル・

モーロン（二八九九―一九六六）の批判的紹介である。作家の無意識につきまとう隠喩から個人的神話という仮説をたてボードレールにあてはめたものである。

B11 『晩年のボードレール』（共訳。一九八五年、砂子屋書房）

イマージュの連合を取り出すために作品の重ね合わせという手法を用い、つきまとう隠喩をとりだすのだが、個人的神話は社会的自我のはたらきを受けながら創造的的自我に働きかけるといふシエマをモーロンは考えた。つまり現実生活の事件は社会的自我によって受容され、個人的神話へと通過し、そこでの時間に従い速度をゆるめ、また個人的神話の生と死の認識に則して解釈し直されてのみ創造的的自我に達する。無意識のはたらきと云ってしまえばそれまでのことなのだが、無意識の中にあるコンプレックスやそれに類したいわば固定的な個人的な（神話）に現実生活からエネルギーと素材を受け取る道を開いたわけである。

そのほか評論社「世界の文豪」シリーズの一冊として、生涯と作品のアンソロジーを訳している。

B7 オルラン・デイ編『ボードレール』（一九七六年、評論社）

またこのシリーズには次のようにランボーも訳している。

B8 ミュッソ編『ランボー』（一九七六年、評論社）

ヌーヴェル・クリティックについては前記「ヴェヴェールの批評的立場」は『芸術の心理学』（一九五八）と『詩的作品の形成』（一九六〇）によって、かれのとなえるテーマの美学的基盤とその具体的例を考察した。『芸術の心理学』は次のように改題して刊行した。

B1 『テーマ批評とは何か』（一九七二年、審美社）

芸術作品のあたえる感動は、芸術家を背後から（つまり無意識に）創造にかりたてるテーマとの邂逅によって触発され、幼少時代へ回帰することから生じる、という大胆な仮説を、文学、絵画、音楽という芸術全般にわたって説いた驚くべき内容なので、できればもとの題の『芸術の心理学』にもどって広く読んでもらいたい本である。

そのほか、

A11 「ルツセルとヌヴェル・クリティック」（一九七七年、『ユリイカ』）

特異な作家レーモン・ルツセル（二八七―一九三三）のシュルレアリスムの先駆的作品の謎について、アンドレ・ブルトンから始めて、ミシェル・ビュトール、フーコー、クリステイヴァ、リカルドーまでどう解釈したかを通観し、その謎が鏡のようにそれぞれの批評的な特徴を浮き上がらせることをみた。

B2 マニユエル・ド・ディエゲス『批評家とその言語』（抄訳。一九

七二年、審美社）

作家の文体は、作家が意識的に世界に回答する以前に発せられた独自の回答であり、読者が暗に文学に期待し敏感に反応するものもこの文体に対してである。そういう視点から批評家の文体を組上のせ、エクリチュールの特徴と批評との関係を分析したものの。ヴァレリー、ブランショ、プーレの箇所を訳出。ディエゲスは一九二二年生まれの批評家であり「コンバ」紙によっていた。原書にはサント＝ブーブまでの文芸批評史が序論としてあり、文体の実存的分析概要が結論になっている。

七. バシュラールの翻訳

B3 『大地と意志の夢想』(一九七二年、思潮社)

バシュラールの四大元素を扱った物質的想像力を論じた名著のひとつ。A5判、443ページという大著であり、引用される新旧の文献は洋の東西を問わず、もちろん、神話、伝説、錬金術、自然科学と多岐にわたり、文字通り訳者を翻弄した。

人間が意志を働かせる場合、普通の人間の現実感覚を支えている現実機能の他に、それと同等の、あるいはそれ以上に非現実機能働いている。意志の働きに想像力の関与するメカニズムを説きながら、強い意志形成に硬い物質のイメージがどのように作用するかを示し、独自の心的エネルギー論を展開する。さらに硬軟の物質の弁証法を軸に、練り粉、岩石、鉱物、結晶、さらには露と真珠の考察にまで及ぶ。

蛇足ながら、今にして思えば、バシュラールが地水火風という四大元素によって想像力の世界を分類し、詩的イメージの働きを追求したことは、大勢の信奉者を生み出したのに、その方法を応用して、バシュラールの取り上げなかった詩人における水なり風なりの詩的イメージ研究がなせ出てこないのか、その理由の一端がバシュラールがイメージを扱う際のダイナミズムやエネルギー論にあるのである。いくら文学作品の中から火のイメージを集めても、それをどう方向づけるのか、人ははたと困惑してしまうであろう。また類似したイメージを多くもつバシュラールの博識も分類の妥当性を裏付けているのだ。バシュラールの想像

力理論は個人的空想に走るところか、すみずみまで作家詩人たちという他者の証言に基づいており、きわめて実証的な配慮が背景にある。

B6 『科学的精神の形成』(共訳。一九七五年、国文社)

院生時代に親しんでおり、出版社をいろいろ当たったすえの翻訳。そのあと教職員組合の執行委員になったおり、同じ委員であった教養部の物理担当の豊田彰氏に会い、訳文全体を読んでもらって、多くの誤りを正すことができ、改訂版をだした。書を電気の絶縁ではなく孤独なというふうになんか文学的？に訳した箇所もあり、盲点に赤面。しかし本書の内容は、人間がものに対してどんなにイメージを作りやすい存在であるか、もののかかわりの「自然」な在り方を豊富な例で示した本であり、表題をもとにセールが難癖をつけた(「義務論——矯正と七つの大罪」「ヘルメスII」)にせよ、形成という視点を少しずらせば、面白さに変わりはないであろう。

B10 『夢想の詩学』(一九七七年、思潮社)

バシュラール晩年の著作で、それまでの物質的想像力の詩学から、方法的にもっと自由な、イメージの動きにさらに柔軟に対応する現象学的な詩学へと転じた作品。しかもアニムスよりアニマに語らせ、孤独な魂の自己との対話における多元性の発見や、幼少時代への回帰から宇宙的なコギトへと、詩的な澄んだ深い境地が述べられている。

B13 『近似的認識試論』(共訳。一九八二年、国文社)

前記豊田氏とフランス哲学の片山洋之介氏とで数年研究会をもち、というより豊田氏の説明をきいてやっとできあがった訳書。

バシュラールの学位論文である。自然科学において測定による対象認識は精密になるにつれ近似的になっており、絶えざる補正が行われている。測定という視点からすれば、客観的な対象とは実験(経験)が限りなく接近していくひとつの観念ということになる。

しかし近似はつねに未完成であるが、それ自体の不十分さを自覚するゆえ、もっとも信頼するにたるものだという主張である。

B22 『エチュード——初期認識論集』(一九八九年、法政大学出版局)

バシュラールの雑誌発表論文のうち五編をカンギレームが編集したもの。「本体とミクロの物理学」、「光と実体」、「認識論の境界概念」、「論証的観念論」のほか、対象認識をおこなう主体の動きを分かりやすく説明した「奇想と細密画としての世界」がある。

八、バシュラール論

A12 「バシュラールのイメージ論」(一九七八年、『現代思想』

Vol. 6-3)

バシュラールの文学観の中心をなすイメージ理論を、科学的認識の障害という否定的な評価から、物質的想像力による肯定的な評価への転換はいかにしておこなわれたか。形式の想像から、内容、実質、質量さらに実体へと移るかれの転換のきっかけは『ロートレアモン』論にあった。

A13 「バシュラールとユング」(一九七九年、『現代思想』Vol. 7-5)

バシュラールの思想形成にあたって精神分析のはたした役割を、フロイトからユングへとたどり、また当時のフランスにおい

て精神分析がどのように受け入れられたかも調べた。

A14 「バシュラールの夢の詩学へ」(一九七九年、『ユリイカ』Vol. 11-13)

深層心理学的な方法から、それまで批判的であった現象学的方法へ、なぜ移行したのか、そういいながらも、アニメス・アニマなどユングの用語を残していることへの疑問を追いながら、魂の内部における多声的な要素が狭い主観性を超える可能性を示すことを論じた。

A15 「バシュラール 人と思想」(一九八〇年、『現代思想』「バシュラール特集号」Vol. 8-5)

バシュラールの人となりと思想を、形成期、ディジョン大学教授としての成熟期、パリ大学の科学史科学哲学の教授としての発展期から晩年まですべての著作にあたり、科学史と科学哲学と平行して詩学の発展を跡づけた。

A16 「バシュラールの想像力理論の理解をめぐって」(一九八一年、『人文学科論集』第一四号)

フランスのフォルマリストの季刊雑誌『ポエティック』四一号掲載のクレーマンの論文に対する批判。揚げ足取り的な姑息な議論なのに、結論がバシュラールを否定する大袈裟なもので大いに怒って批判したが、フランス語に仕上がったのが残念。

次からはバシュラール『水と夢』についての『人文学部紀要』掲載論稿四編である。

A17 「バシュラール『水と夢』における実体の問題」(一九八三年、『人文学科論集』第一六号)

A18 『水と夢』における愛と死と物質の問題」(一九八四年、『人文学科論集』第一七号)

A19 「水のモラル」(一九八五年、『人文学科論集』第一八号)

A20 「水のパロール」(一九八六年、『人文学科論集』第一九号)

以上の論稿のうちクレーヌマン批判を除くものを集めて刊行することができた。

○「バシュラールの詩学」(一九八九年、法政大学出版社)

すでに雑誌に発表した論稿に手をいれ、未読の論文などにも目を通し、科学と文学両方面の大学者バシュラールの全貌をできるだけ忠実に描き出そうとしたわたしの唯一の著書。科学分野についてはわたしの能力の限界を感じたことも事実である。後半の『水と夢』を論じた部分は、物質的創造力の構造を実体 substance というかれの愛好する概念をキーとして分析したものである。彼自身の核心には創造 creation あるいは独創 originale への深い志向が感じられるが、セールのように科学と文学の断絶を認めず、バシュラールの区別した認識論的断絶を否定するひとが、バシュラールの科学的認識論の著作よりもポエティックの著作に新しい可能性を認め、バシュラール自身もその点に気づいていたのではないかと、といっているのは大いに心強い。

九. 『バシュラールの詩学』以降のバシュラール論

A22 「バシュラールの物質的想像力における切断と連続」(一九八七年、『人文学科論集』第二〇号)

バシュラールの構想する文化コンプレックスには、無意識に蓄積された経験の単なる延長ではなく、一種の断絶があり、バシュラールは文化コンプレックスを普通のいわゆるコンプレックスに接ぎ木されたものと捉えている。そのメカニズムを解明しようとしたがうまくいかなかった。

A24 「イマージュと実体」(一九八九年、季刊 *ichico*, 十一号)

バシュラールの物質的想像力という物質 *la matiere* は実体 *la substance* にあたるものであり、いかに形態の想像力から遠く、詩的な喚起力の豊かなものであるかを説いた。

A23 「バシュラール『瞬間の直観』の諸問題(1)」(一九八九年、『人文学科論集』第二号)

A25 「バシュラール『瞬間の直観』の諸問題(2)」(一九九〇年、『人文学科論集』第三号)

A26 「バシュラール『瞬間の直観』の諸問題(3)」(一九九二年、『人文学科論集』第五号)

『瞬間と直観』は既訳があまりにも日本語の意味がとりにくいで、訳をし直すつもりで読みこんだもの。バシュラールはベルグソンのいう持続に批判的で、持続に構造がないことが不満なのである。瞬間という時間の要素をもって、不連続的連続という考えをうちだした。もともとループネルというディジョン大学での同僚の思想家の著書『シロエ』を発想源としていたので、それを参照することも念頭にあった。

A27 「バシュラール〈ヘニフィアンの詩学〉覚書」(一九九五年、『人文学科論集』第二八号)

ポエジーにおける音韻の分析は言語学者、音声学者の学問的標的ではあるが、なかなか的を射抜くことは困難なようである。バシユラールは呼吸と声の微妙な関係を、心身の有機的関連として分析し、さらに声なき朗唱という内面的な音の響きまで射程に入れ、文学読解の深奥にせまっている。

A28 「沈黙の詩学覚書」(一九九七年、『人文科学論集』第三〇号)

ポエジーの根源にあることば。ことばはどんなときにポエジーになるのか。バシユラールの発した問いはそこまで進む。沈黙、静寂が、人間を自己にもどすとき、あるいは他者のことばの不在が、自己を回復させるとき、他者とのコミュニケーションから解放されたことばの自由な飛翔がポエジーではないか(ポードレール)。さらに沈黙した自己を眺めるナルシスというヴァレリーのケースまで。

十. ツヴェタン・トドロフ(一九三九年生まれ)

トドロフは構造主義の旗手として多彩な活動をしており、かれが友人のデュクロと編集した『言語理論小事典』は大変重宝なものである。しかし『アメリカの征服』で見たトドロフは全く別人のような一面をあらわしている。アメリカ大陸への西洋の侵略を鋭く告発する論法は、文学のテキストを分析するいつもの冷静さの下に隠された熱い思いを示している。コロンブスからサアグンディオ両方の側で、記号体系に他者をとりこむメカニズムを明

らかにしたのである。もちろんかれが培ってきたテキスト分析の方法は縦横に駆使され、きわめて明快に文化的な闘争の跡をたどり、なによりもかれの意図を説得的に示すのに役立っている。

B18 『他者の記号学——アメリカ大陸の征服』(共訳。一九八六年、法政大学出版局)

B22 「航海家と原住民」(一九八八年、ガレン編『ルネサンス人』岩波書店所収)

西洋が他者あるいは他の文化をどのように発見し、それをどのようにして理解するかを、アメリカ発見を例に明快にたどって見せた好論文である。

B19 『象徴の理論』(共訳。一九八七年、法政大学出版局)

西洋における象徴体系の理論を、まず記号学としてギリシャの意味論、論理学、修辞学、解釈学にさぐり、その展開を中世から古典主義までの修辞理論と美学の模倣説にたどり、その危機をロマン主義の美学にみるという、気宇壮大な象徴理論の展望はトドロフの記号論の基盤をなすものである。その他レヴィ・ブルジョール、フロイト、ソシユールにおける象徴についての理論的欠陥の指摘。とくにフロイトの『機知——その無意識との関係』で使用されたレトリックの分析は鋭く矛盾をえぐり出している。

最近のもっとも総合的な象徴の研究である小田部胤久氏の『象徴の美学』(一九九五)において記号論の立場を代表する斬新な解釈として本書が取り上げられ、批判がくわえられていることを付記する。

B23 『象徴表現と解釈』(共訳。一九八九年、法政大学出版局)

『象徴の理論』の続編というべきもので、中世の教父たちの聖書解釈学とスピノザを祖とする古典的文献学を、解釈の戦略の二大類型とし、人間の本質的活動としての象徴表現とその解釈を総合的視点から問い直す試み。この二著にはフォルマリストに加えられた非歴史的という批判に対するトドロフの反省という意味もある。

B21 『はかない幸福——ルソー』（一九八七年、法政大学出版局）

フランス近代社会を準備する思想家ルソーの膨大な著作を渉獵して、自然と市民の概念を厳密に規定し、その体系の中で矛盾を明らかにしながら、ルソーの本音を明らかにした、実用的読解と謙遜するものの、胸のすくような著作である。この本あたりから言語学者から文化人類学、あるいはユマニストへの転換が準備されていたことがうかがえる。表題を『ルソー——はかない幸福』とすればもっと売れるのとは、当時の生協書籍部の某君の言である。

B25 『批評の批評』（共訳。一九九一年、法政大学出版局）

トドロフの批評活動にとって、批評とはまず文学研究であり、かれの構造主義はロシアフォルマリズムが出発点である。その陣営の人々を始め、サルトル、ブランシヨ、バルト、ノースロップフライと二〇世紀の錚々たる批評家をとりあげ、その本質を浮き彫りにし、トドロフ自身との距離を認識しながら、対話あるいは対論としての批評をめざす。実証派のポール・ベニシューとの文学研究の方法をめぐる対談は、文学の本質を探究する二人の真摯な知的熱意が冷静なやりとりの中から伝わってくる感動的なもので

ある。

ブルガリヤ生まれのトドロフはパリに留学して、そのまま国立科学研究院で研究員となり、フランスに帰化する。一九九〇年一〇月にはフランス政府の文化使節として来日したので慶応大学の講演のあと、浅草でしたしく話す機会があったのは、訳者として嬉しいことであった。

十一・ミシェル・セール（一九三〇年生れ）

セールは科学哲学から出ていまやフランスの代表的な哲学者のひとりである。わたしがセールの著書に親しんでいたのはバシユラールを批判するバシユラールの門下生としてである。バシユラールがベルクソンを批判していたように、新しい哲学者は先行する権威を批判することから始めるのはフランスではごく普通のことである。パリ第一大学教授で一九九〇年アカデミーフランセーズ会員に選ばれた。一九九一年東京の日仏会館で訳者たちとのテーブル・ロンドがあり、茨大から豊田氏や青木研二氏とわたしが出席し、司会をつとめた。

B15 『生成』（一九八三年、法政大学出版局）

セールはすでに大著『ライプニッツの体系とその数学モデル』やヘルメスのシリーズ五冊、ジュール・ヴェルヌ論、ルクレティウス論、カルパッチオ論、ゾラ論を書いている。そうした思索をふまえ、新しい哲学というよりは、哲学の新しい対象の出現をセールは説く。混沌とした自然の生成における、雑音つまりバックグ

ラウンドサウンドを手掛かりに、認識活動の始源にさかのぼり、イマージュの多元的な力を駆使しながら、多元的な認識を試み、既製の知の領域を横断し、異分野の中に共鳴するものを探りあてていく知的冒険をすすめる。

B16 『離脱の寓話』（一九八五年、法政大学出版社局）

セールの書いた寓話四編。「農民」は中国旅行の印象。「船乗り」はヨットの航海を趣味とするセールの、海の男の誇りの話。「彷徨者」は一枚の絵をもとに、文化人類学と宗教学的知識を動員した生と死をめぐる瞑想。「フランチェスコの徒」はディオゲネスをモデルに価値と物神と商品の関係を逆転させ、新しい知の可能性をかいまみせる。原書は改訂版が出されたがほとんど小さな字句訂正に終わっているので訳文には影響がないと思う。

A21 『ミシェル・セール』『パラジット、寄食者の論理』（一九八六年『現代思想』四月号）

当時翻訳進行中の本書の内容紹介である。とくに西洋文明における大きな楽しみをなす会食に不可欠な寄食者を、ことばによる参加者として、生産と消費という両極の中間に位置付け、文化の第三の担い手として、創造の新しい因子とみなした点を力説。

B20 『パラジット——寄食者の論理』（共訳。一九八七年、法政大学出版社局）

ラ・フォンテーヌの「都会のネズミと田舎のネズミ」をもとに寄食者の典型を設定し、これをキーワードとして、モリエール、ルソーからプラトン、聖書など「知の宝庫」の解説を試み、人類学、生物学、情報理論などを横断するトリックスターを誕生させた。

寄生虫学、情報科学と文学、テーブルマナーと民族学とを直接ぶつつけるのである。のちにセールはこの本で人間の悪の問題を取り上げたといっている。「わたしはただ乗りが、あらゆるごまかし同様、大嫌いなんです」。「新しいことを発明したいのか？ それならば、ごまかしはやめよ」〔「解明」邦訳、200〕。こんな自明のことをいうのにこれほどのレトリックを駆使しなければならぬほど、現代の知的世界は複雑化しているのである。

B28 『自然契約』（共訳。一九九四年、法政大学出版社局）

地球規模にまで肥大した文明化が人類の未来を危うくしている。人類が生き残るためには人間と地球が対等の「自然契約」を結ばなければならない。自然への寄生的濫用関係を正当化してきた従来の一方的社会契約を改め、人間と自然の共生関係を発展させるような新しい自然契約を締結しなければならない。そのためには権力者の暴力だけではなく、個人の内なる暴力にも警戒の目を光らせなければと、セールは真剣に説いている。ルソーの社会契約に対し現代では自然契約が必要なことを、法哲学までさかのぼって考えている。ヒロシマの原爆以降、現代の重要問題は法律と科学のかかわりを通り抜けてしまっているという反省にたった、新しい哲学の模索なのである。どのようにして政治学が物理学の中に宿っているのかという問題を斬新な角度から切り開いて行く。

B29 『両性具有——バルザック『セラフィータ』論』（一九九六年、法政大学出版社局）

バルザックはセールの愛好する作家で『知られざる傑作』などはたびたびエッセーにも登場するが、中編小説『サラジュー』の主

人公のカストラートをめぐり、男と女、男の中の女、あるいはその逆、右と左、右利きと左利きといった人間の対称―非対称の要素を洗いだし、生と死、死と芸術について考察をめぐらし、神話学、人間学、考古学などの知見を動員しながら人間の重層的なありかたに光をあてた。もちろんバルトが『S/Z』でおこなった記号論的分析に対する反論という意味も含まれている。

A29 「バシユラールとセールの複雑性」(一九九七年、『大航海』第一六号複雑系批判的入門)

バシユラールは科学の対象を関係の束とみなし、単純なものは単純化という操作の結果であると断定した。デカルトは複雑なものを単純な部分に分解して理解するように薦めたが、現代の科学は単純な外見の下に実在する複雑なものを読み取ろうとする。

セールはさらに進めて、だれも原子の本当の末端にふれることなく、究極の要素の探求は不可能であるが、単一性が確定できないからといって多様性を捨てるということにはならない。存在の探索から関係の探求に変わらざるをえなかったのだとみなす。だからその要素は諸関係の結節となり、すべてのシステムはこれらの要素を結ぶ網の目となる。セールはこの網の結節点の間に従属関係はなく、それぞれ固有の力や決定権をもつし、それらの経路は必ずしも最短距離が最良の通路ではなく、論理的には必然的な通路は存在しないと考える。セールは伝統的な概念のもつ線形性を打破し、複雑性こそ知と経験の最良の補助者だという。この関係の網の目は速くから見れば大きな海にも、混沌そのものにも見える。だが大海に船出し大波の多彩な壁に取り囲まれノイズ(ノ

ワーズ)の中でラ・ベル・ノワーズを発見するような知的冒険に乗り出すべきなのだ。

十二. その他の翻訳

B4 ビュルネイ『愛』(一九七三年、白水社、文庫クセジュ)

フランス語のアムールという言葉、あるいはその観念は、人間の神への愛から性的な関係まで幅広くしめすが、本書は西洋における愛の歴史を略述し、人間的次元における諸相を概観し、モラルと制度における問題点を分析したあと、個人的な愛から、人間愛、人類愛へと飛躍し国境を越えた愛の活動を展望する。一年次のゼミのテキストにすればよかったかもしれないと今にして思う。

B17 サンジェ『弁論術とレトリック』(共訳。一九八六年、白水社、文庫クセジュ)

古代ギリシャから現代のフランスまで弁論術教育の変遷を扱った前半はかなり学術的であるが、後半は弁論術の具体的教育方法を扱う。言語表現の教育の簡潔な歴史とも、口頭発表の具体的な教育方法という面でも、出色の内容である。一年次の文学方法論という時間にテキストとして使用したことがあるが、やや前半のレヴェルが高すぎたようで、圧縮した表現をかみ砕いてやらねばならなかったことが記憶に残っている。また半期では後半部分には手がつけられなかった。

B9 シオラン『苦渋の三段論法』(一九七七年、国文社)

ルーマニア生まれの思想家というべきかそれともニヒルなモラ

リストといふべきか。シオランパリに住みフランス語で独特の終末論的なアフォリズムを書いていた。人類の命運にかかわる深刻な問題を眉も動かさずに平然と報じるかと思えば、一方身辺の些事から予想だにしない重大な危機を読み取るというかれのお家芸が示されている。

B12 シオラン「ジョゼフ・ド・メーストル論」〔『深淵の鍵』所収。一九八二年、国文社〕

反時代的な立場を標榜するシオランは、フランス一九世紀の反革命の思想家メーストルをニーチェや聖パウロに匹敵する位置にあるとみなし、自らの精神の系譜に加える。本論はメーストルの選文集の序として書かれたものであるが、メーストルの現代的意義を熱をこめて説いている。ちなみにメーストルの反進歩、人間の理性に対する強烈な不信こそは、ボードレールが心底から共鳴した態度である。

B26 ドティエンヌ『ディオニュソス——大空の下を行く神』(共訳。一九九三年、法政大学出版局)

酒と陶酔の神として古代ギリシャで熱狂的信仰を集めながら異様なよそ者の神として排斥されるディオニュソス神の、誕生、迫害、報復、遍歴をギリシャ各地方の固有の文化のコードとの関係として捕らえなおして解読した野心的なこころみである。ギリシヤ神話を手軽に使う哲学者たちはこのような背景を心得ているのであろうか。

B27 ヴェルナン『眼の中の死』(共訳。一九九四年、法政大学出版局)

仮面をつけたギリシヤの神アルテミスとゴルゴの特性を、自己

同一性と他者性というきわめて現代的な視点から考察した論考。超自然的な力を發揮しながら人間を死と直面させるこの神々の異様な形態と行動を解明しながら、西洋的な思考の根源としてのギリシヤ的英知とは何かを問う。

そのほか雑誌にのせた翻訳とか書評紙に書いた書評なども枚数の割りに苦勞したもので、いずれリストアップしておくことにしたい。

十三 むすび

論文について。学生時代に、ランソンの流れを汲むソルボンヌの実証学派であった有永先生から教わった学者の仕事とは、まず厳正な考証によるテクストの提供であり、文学史的な領域でも史的な事実の博搜と確立であり、その作品の鑑賞や評価ということに読者にまかせる。だから学者と読者の間には判然たる一線が引かれていた。一方、竹村先生はバルザックの作品に取り組み、作家が作品をどのようにして書くのか、創造の秘密に肉薄し、悪戦苦闘する自分の研究の舞台裏まで率直に見せてくれたが、それはいわば読者としての最高のパフォーマンスに違いないのだが、はたしてそれは学者の仕事なのだろうか。あのころの先生方のみこととお手本の間において、自分のとるべき道に迷ったことを思い出す。ボードレールやバシュラールの作品についてわたしはどちらの側に立ったのだろうか。読者の側であることは間違いない。

だがロラン・バルトがいうように、テクストを提供する学者もまた読者であることを免れることはできない、実証的研究者といえども必ず読者の段階を経過するからである。テキスト供給とか、文学史の研究という本国でなければ実行不可能な方法論とは別に、また研究というより評論といふべき徹底した読む自己へのこだわりともちがった、ヌーヴェル・クリティックの方法は詩的感動の本質へのアプローチする道を開いてくれたのだが、はたしてその意図は実現されただろうか。わたしの論文は、その方向を指した試みの貧しい痕跡にすぎないのである。

文学理論としてはプラン、バシユラルのほかヴェール、モロン、トドロフと紹介し、またその中にはいくつも論文まで書いたものもあるのだが、いったい文学とは何かという問いに、果たして答えたであろうか。いずれも本質にかかわる解答は用意しているものの、それが特異であればあるほど全面的な同意からは遠く、逆に一般的、普遍的な解決を目指した解答の方はそれだけで特異な個性の解明にふさわしくないとと思われる。今なおこの矛盾に宙づりになっているのである。なお、わたし自身の論文は紀要には発表しない時期もあるが、翻訳の解説や後書きでかなりのページをとっているのも、まったく翻訳だけしかやらす原作者の代弁だけしていたという批判は当たらないと思っている。

セールのいうように問題を局部に限定し、そこからさまざまな意味を取り出して行くことしか有効な方法はないのだとすれば、これはすべての企てに有効性を付与してくれそうな態度だとも思われるのだが、しかし普遍性がかすかにでも遠望されていること

が望ましいことはいうまでもあるまい。だが文学研究ははたしてそこまで行けるのだろうか。

翻訳について。詩や小説といういわゆる文学作品がほとんどなく、大半が文学研究か評論である。べつに小説を毛嫌いたわけではない、たまたま依頼されなかっただけである。こちらで訳してみたいものもないわけではなかったが、面白そうなもの、あるいは売れそうなものは、いち早くだれかが版權を押さえたりして、実現しなかつたのである。それはともかく、評論だから小説のような訳文の苦勞はあるまいという、密かな、あるいは大びらな、訳者にたいする批判めいた意見に答えておこう。シオランのようなアフォリズムは格別だとしても、個性的な文体を駆使し独自の文章の世界を形成している批評家も多いのである。バシユラルの比喩の豊かな男性的な暖かい文章や、セールのフランス語の多義性を生かし、散文の可能性を徹底的に追求した文もある。たとえば時間を表す *temps* にもう一つの意味の天候を加味したり、サンス（意味）というごく普通の語に方向とか感覚という別の意味を響かせるといった反面、省略の効果も十分意識し引き締まった文章を前にすると、どんな風に日本語にしたらいいのか途方に暮れてしまう。それと比べると、トドロフはまったくそういった文彩をそぎ落としている。しかし言いたいことは過不足なく伝達できるいわば中性的文体をもっている。こんな特徴をできるだけ日本語に盛り込むよう訳者は苦勞するのである。たとえば先程のセールのサンスにしてもルビを活用することはもちろんだが、前後の関係から方向⇨意味としたり、方向⇨感覚としたり、あるいは方向⇨

感覚Ⅱ意味と三連にするような工夫がほどこされる。けれどもあまりくどい指摘はかえって文章の速度をそぐので、ほどほどにしなければならぬ。いちばん困るのは、同音系統の語句を並べ、あるいは原文の展開に文字の音韻のレベルがかなり寄与している場合である。そのまま日本語にしても、文の繋がりが悪く、ぎくしゃくしたり、論理的な飛躍があったりして、大いに訳者を悩ますのである。要するに原著の文章の自然な展開が訳文にもなんとか生かされないかという苦心はたえず存在する。しかもある時点で、というより、最終的には原文から離れ、原文から独立した日本語として読まれうるように検討し、そして補足すべき文言があれば最小限の挿入をおこなうこともある。しかしいつものことだが訳者の頭には原文がちらついてなかなかうまく行かないのが実情である。また校正の段階で、誤訳の修正ができればこれにこしたことはないが、訳文の脱落に気づくこともあって、自分の迂闊さに一人赤面することもある。誤訳は仕方がないがせめて脱落は無くしたいというのがわたしの自戒の言葉である。

振り返ってみるとわたしの文学研究や批評はラカンとデリダ以前のものである。これはまさにわたしの理解の限界を示している。近年の学会発表にはこれらの難解なモデルを文学作品に適用して興味ある成果を示しているものも多いのだが、わたしとしてはバシユラルが新しい理論に立ち向かうとき述べた決意、自らの脳髓に反して考えるところという苦痛に耐え切れなかったのである。努力が不足していたと大いに反省している。だがセールによれば、バシユラルが非ーテクルト的な新しい科学的精神を提唱し

たとき、モデルにした非ーユークリッド幾何学が、実はすでにブルバキによる数学の大変革によって時代遅れになっていたという事情がある。あの勉強家バシユラルにしても時代の先端について行けなかったのである。このことをもってひそかに慰めることにしよう。しかしわたしの訳した思想家たち、トドロフもセールもまだまだ元気に活動しており、デリダやラカンの呪文をまったく歯牙にもかけずわが道を行っている。これはまことに心強い限りである。両者の関心が第三世界に向かっているのは偶然のことであろうか。もちろん方法は違うし、立場も離れているのだが、西洋文化優先、フランス文化中心という独占的価値観を離れようとしていることは明らかである。セールはしかしフランス語を手放さない。それどころかますます意識的にフランス語の美しさを誇り、多義性を駆使し表現の可能性を限界まで追求し、フランス語の微妙なひだに入り込み、ある限られた部分を深く掘り下げながら、普遍的な広い展望に到達しようと苦心している。そのセールが多言語主義を認め、民族の言語の独自性を容認し世界の多元的な可能性を開花させるべきだというのである。新しいカルチュラリズムの到来を祝福する点ではトドロフも同じである。ではこれからの文学研究はどうなるのであろうか。それはわたしの今後の問題である。

最後に これまで研究の上でお世話になった方たちや、共訳者の方たちに改めて感謝の言葉を記しておきたい。

また乏しい研究予算のせいで丸善や紀伊国屋やフランス図書の本三書店それから茨城大学生協書籍部にはご迷惑をおかけした。と

りわけ丸善洋書部には大学院の学生のころから（つけ）を認めてもらい必要な研究書を積み上げることができた（まだ目を通してないものもある）。読まない本や読めない本まで手を伸ばすことができずとも学者たちのメセナ丸善の好意のお陰である。長い間ありがとうございました。

自己点検には 教育というもう一つの側面についても触れるべきであろうし、大学行政などにもふれておくべきであろうが、それは別の機会に考えることにしたい。

いまわたしはマラルメの一行を口ずさむ

La chair est triste, hélas, et j'ai lu tous les livres.

（肉体は悲しい、ああ、われすべての書を読みぬ）

もっともわたしは字あまりになるが次ぎのように変えて読みたい気がする

La chaire est triste, hélas, mais je n'ai pas encore lu tous mes livres.

（講壇は悲しい、ああ、われいまだすべての蔵書を読まず…）

（一九九七年一〇月）